

2025 年度 大学院入試（10 月期）（発達心理学専攻・発達心理学コース）

博士課程（前期） 「専門科目」

（2024 年 10 月 5 日実施）

選考・判定方法 《専門科目》《英語》《口述試験》
専門科目（200 点）、英語（100 点）および口述試験（4 段階評価）により評価する。
判定基準 専門科目：100 点以上、英語：50 点以上、口述試験：C 以上のいずれも満たすこと。

《専門科目》（200 点満点）

【1】

出題意図

発達心理学の基本的知識およびスキルとして、実証的な論文に記載されているデータとその分析結果が理解できるかどうかを見る。

正答例

学習と基本的生活習慣の 1 項目あたりの平均値に注目すると、学習が 2.20～2.64、生活習慣が 3.45～3.66 であることから、親の期待は学習面より生活習慣が高い。

学習への期待については学年と親の主効果が有意で交互作用が有意でなかったことから、年中よりも年長の方が、また母親よりも父親の方が学習への期待が高いことがわかる。

一方生活習慣については、学年と親の主効果は有意でなく、交互作用が有意であった。単純主効果の検定結果は示されていないが、平均値を見ると、年中の時点では母親と父親の期待に差がないが、年長になると父親に比べて母親の方が生活習慣を身につけることに関する期待が高まることがわかる。

図表出典

菊池知美・松本聡子・菅原ますみ. (2011). 幼稚園・保育所に対する両親の期待：年中時から年長時への縦断的变化. 発達心理学研究, 22, 55-62 (一部改変).

【2】

出題意図

発達精神病理学に関する基礎的な知識を有しているかどうかを判定する。

正答例

幼少期に受けた虐待体験が子ども期の健康や発達にネガティブな影響を及ぼすことは児童精神医学や小児科学、臨床心理学、発達心理学等の領域で既に多くの実証的研究が蓄積されてきた。また近

年、成人期・老人期に至るまでの長期的な影響性に関する予防医学的・神経生理学的研究が活性化し、被虐待経験が子どもに過剰で慢性的なストレスを与えて脳機能の発達不全や遺伝子発現に関するエピジェネティクスに変性が生じた場合には、神経系・内分泌系・心臓血管系・免疫系など広範囲な身体機能に悪影響が及び、成人期以降のさまざまな心身疾患発症のリスクが高まることが明らかになってきている。

【3】

出題意図

発達心理学の基本的概念と発達の考え方が理解されているかどうかを見る。

正答例

エリクソンは心理社会的観点から、英知をパーソナリティ発達の到達点として位置付けた。中年期以降、肉体的・精神的な喪失や機能低下に対処すべく統合(integrity)を達成することが重要な発達課題であり、それを通じて英知が獲得されるとされた。すなわち英知とはさまざまな加齢のあり方についての幅広い知識をもち、自分なりの価値観や信念をもちつつもそれを自問し相対化する柔軟な考え方をもちことである。

そのような英知の捉え方はパーソナリティ発達にとどまらず、人生や社会についての実践的(practical)知識の深化としても捉えられる。すなわち知能検査や学校で課される問題は正解があるのに対して、人が社会の中で生きていく過程で出会う実際的な問題の多くは正解がない。英知はそのような複雑な問題に対して、人間や社会に関する豊富な知識を使い、自己の視点や信念を相対化しつつじょうずに対処することでもある。

歳をとることと英知の関係は以下のように考えられる。歳をとことはさまざまな経験を重ねることであり、それは英知を獲得する機会を増やすことにつながる。しかし多くの経験を積みさえすればそれだけで英知が獲得されるとは限らない。遭遇した問題と自分の対処のしかたを内省(reflection)し、それまでの自分の知識や理解の枠組みを幅広く柔軟なものに更新させていくことが必要である。

【4】

出題意図

発達心理学の研究を遂行するために必要な研究計画力、論理的思考力、表現力、基礎知識を判定すること。

正答例

本研究では高齢者の well-being の促進を目的として研究を実施する。本研究では社会参加の参加頻度に着目し、社会参加の参加頻度が高いほど、well-being が高いという仮説を設定して研究を実施する。研究対象者は地域の老人福祉センター等で社会参加活動をしている65歳以上の高齢者を対象とした質問紙調査を実施する。調査においては、社会参加への参加頻度を独立変数とし、well-being を

測定するために生きがい感を従属変数として設定する。参加頻度は、過去1か月における社会参加の参加頻度について、1, ほぼ毎日、2, 週に2, 3回、3, 週に1回程度、4, ほとんどしていないという選択肢を設定する。生きがい感については、今井・長田・西村（2008）のIkigai-9等の既存の尺度を用いて測定する。分析は、社会参加の頻度を独立変数、生きがい感を従属変数とした回帰分析を行う。